『生者たちの統治　コレージュ・ド・フランス講義 1979-1980 年度』

2022/12/6

Mせんせい

1980/2/20

テルトゥリアヌス（続き）

■　テルトゥリアヌスによって示された重要な一連の区別

第一の区別	罪の赦免という神的な働き	みずからに行使しなければならない営みや労苦（人間的営み）
第二の区別	真理の教え 信仰の真理 キリスト教徒の生活の根本規則への入信としてのカテーケジス	悔い改めの訓練＝教え、パエニテンティアエ・ディスキプリーナ 魂が悪から離れ、それに抵抗し、戦、そこから解放され、さらには洗礼が終わったとの未来においても、悪魔の狡猾な攻撃や全ての堕落の可能性に対して戦い続けることができるよう訓練するための営みや労苦
第三の区別	救済をもたらす真理への魂の到達	救済をもたらす真理への魂の到達の道程において、異なったプロセスがまさに真理への到達のために必要であること

・　異なったプロセスは、入信のプロセスではないが、真理への入信に必要
　- 魂がみずからのために真理を試練＝吟味として現出させること：魂の試練
　- 魂は己の真理を表明しなければならない
　：根本的な区別≠分離・分割
　→　これらの連動こそが、キリスト教史、一般的に西洋における主体性の歴史において非常に根本的なもの

メタノイアという新プラトン主義的な概念からの離脱 p164，L19

■　テルトゥリアヌスとともに分離するもの（真理への入信と魂の真理の試練の区別）
　：プラトン化の流れとでもいうべきものが分岐するということ
・　メタノイア：回心＝転回という概念や経験や形式から分離
　- 影から光へと移行する運動のこと
　- 真理における存在、存在の真理に到達することによって、同時に必然的にみずからの真理も発見する
　　→　魂はそれを照明する存在と同じ本性に与っている
➢　存在への到達であると同時におのれ自身の真理への到達
➢　魂が真理において再認[＝認知]し、みずからを再認し、真理をおのれ自身の奥底で再認することを可能にするもの
→　「再発見」という[様態]、記憶
・　キリスト教がグノーシスやあらゆる二元論的運動を振り払い、そこから離れようとする努力において起きた
・　テルトゥリアヌスとともに破裂、あるいはテルトゥリアヌスはそれが破裂しつつあることを表明した
➢　キリスト教思想、キリスト教、そして西洋全体にとって、根本的に新しい歴史、主体性と真理の関係のたいへん複雑な歴史がはじまる

■個人経験の問題から制度化された伝統の問題へ

・　魂がみずからをみずからの記憶の奥底で再発見しながら真理を発見する、という運動…

記憶	魂が自分自身で真理を発見すること
制度化された伝統性の問題 ：教理としての真理	いくつかのプロセス、手続き、技法の対象に ：自分の存在を語り表明するという義務
信仰	告白

→　西洋世界の分析でこれまで誰も完全に分析してこなかったものの歴史

- 「お前が誰なのかを語りなさい」ということの歴史

「真理へと向かいなさい、ただし、その間に、お前が誰なのかを私に語ることを忘れないように。なぜなら、もしそうしないならば、お前は真理に到達しないだろうから。」

２世紀以降の洗礼志願期制の発展。P167，L19

・　テルトゥリアヌスの著作『悔い改めについて』

- 孤立したものでも、先駆的なものでもない
- 当時生じていたことをとくに念入りに練り上げた形式として現れたもの

・　それまで全く存在していなかった新たな制度「洗礼志願期」も同時期に現れる

- キリスト教徒の生活、あるいはキリスト教徒たろうとする者の生活における命令や特別の範疇であったものの組織化

■　洗礼志願期制確立の背景

・　入信希望者は殺到するが、所詮は希望者→宗教生活の弱体化と道徳的厳格さの弱体化

・　迫害の存在や強化→十分な育成も受けていない、無防備なキリスト教徒がキリスト教を棄てる事態へ

・　異教徒たち、異教との論争→キリスト教徒である者が、十分に熟した教理と厳格な道徳を提示する必要性

➢　異端との戦いが、洗礼志願期の組織化を必要とさせた

➢　真理への入信が、道徳的な準備や自己の自己に対する訓練といった一台系列と結びつくようにする必要性

洗礼志願期の過程に働く真理の諸手続き。P169，116

■　二世紀末以来の洗礼志願期

・　キリスト教的な生活に従って規則付けられ、管理された準備期間

・　洗礼そのものに従って規則付けられ、管理された準備期間

- カテケージス（真理の教え）と真理の訓育が道徳的準備や訓練と結びつけられ、<u>魂の変容のプロセスを現出させ、真正なものとし、確証する手続き</u>が行われる。

■　「お前が誰なのか私に語りなさい」の観点から語る洗礼志願期

・　聖ヒッポリュトス『使徒伝承』より

①洗礼を志願するとき	これから始まることは公にされてはならない：半ば秘密で公のものではない会合 - 志願者は「信仰を求める理由」を尋ねられる - 志願者を連れてきた人（証人、代父、後見人）は、その人が神の言葉を聴くことができるかどうかを確かめるため証言する ：尋問＝検討の手続き
②聴講者の時期	聴講者：いくつかの命令や指令に従った生活を営む
③実際に洗礼を受けるとき	- 志願者は、志願期そのものについて尋ねられる。 - 後見人＝代父は、聴講者の生活について証言しなくてはならない ：尋問＝検討、新たな尋問＝試練

④聴講者→えらばれた者（エーレークティー／コンペテンテース）	– 一定期間、より厳しい準備、すなわち修練的な一連の実践（祈り、断食、徹夜、跪拝）を受ける – これが厳格なのは、信仰の真正さを試すためにほかならない。
⑤最後の戦い「闘技場」の時期	– キリスト教的生活の闘技者になるための訓練の時期 – 悪魔祓いの儀式 ・ 司教は洗礼志願者のそれぞれの悪魔を払い、純粋かどうか調べる →「あなた方が純粋であることを試験した、証明した、実証した」

■ 悪魔祓いの重要性

その１．所有権剥奪の儀式として

・ アダムの堕落と過ち以来、人間の魂はサタンの所有物、王国、居所、教会になってしまった：魂はサタンの所有物に！！！

➢ 悪魔祓いは悪魔の排除、追放、所有権剥奪の儀式、主権の移行の儀式

その２．真理の試練として

・ 魂はその所有者に、正当な主人に返還する

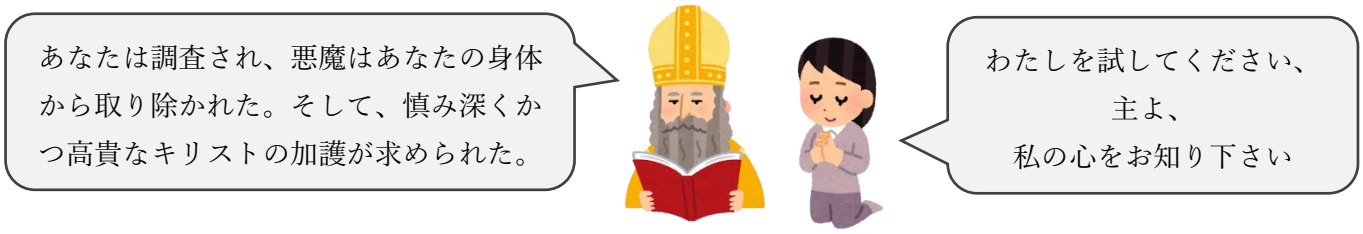
– 魂が実際に、それを束縛していた古き執着から真に解放されたことを示すもの

→ 貨幣のモチーフ：金属を火にかけて試験する

– 火は金属の不純な要素を分離して、純粋さそのものとする

：分離の操作、清めの操作、金属の真正さの試練

悪魔祓いは清めでもあり、追放でもある：探索や検査（スクルーターメン／エクサーメン）



➢ 人間の身体の中に不純なものが何かないかを知る

■ 洗礼志願者が洗礼準備の過程を通じて受ける二つの大きな真理の試練

・ 志願者およびその承認に対する質問―調査の系列

・ 真理の試練：悪魔祓い

➢ もっとも本質的で、もっとも恒常的で、もっとも古い業、キリスト教徒の実存の組織における最初の真理の業：信仰告白

– 第三の試練：洗礼のとき

➢ 真理の業としてのこの信仰告白とともに、洗礼志願者の実存の過程における真理の試練の過程が完成

- 第四の真理の試練
  - 罪の告解の問題：洗礼志願者は自分の過ちを認めなければならない（エクソモロゲーシス）
  - 自分の犯した過ちというよりは、自分が罪人であるという事実、あるいは多くの罪を犯してきたという事実を実際に認めること

真理の体制の歴史における洗礼志願期という実践の重要性。P176, l20

■ 洗礼志願期の制度：テルトゥリアヌスが表明した原理を実行に移したもの

- 魂が真理に到達するための条件／代価として、みずからの真理を現出させなければ、真理へと導かれることはない
  - 真なる存在がお前に現出するためには、お前の存在をなす真理を現出させなければならない
  - 「お前が誰なのかを語りなさい」
- 「お前の存在をなす真理を現出させなければ真理にはたどり着けない」という原理が、早くも３世紀には真理の現出化のごく明確で具体的な技法の内で具体化した
  - 信仰告白という実践は、悪魔祓いと尋問―調査との区別の試練

洗礼神学に新たな強調点が生まれたこと。P177, L13

- この実践の行使や発展→洗礼神学のある要素に力点を置く新たな方式が見られる
  - 罪の赦免
  - 救済の神学

第一の生	洗礼	第二の生／再生
肉体をもった両親からの生	ある生から別の生への、ある誕生から別の誕生への移行の業	万物の支配者である＜父＞神その人との親子関係で生まれる
死のごとき第一の生	《接続！！》	真なる生 生命そのものの生

- ３世紀以降、聖パウロに見られるいくつかの主題への回帰：洗礼はいわば死に処すること、埋葬のようなものと定義されるように
  - オリゲネス：洗礼の水や洗礼池を「墓」という言葉を使う

➢ 洗礼が与える第二の生は、実際は厳密な意味での復活
  - 洗礼準備：死を準備するというよりも、死を私たち自身に行使し始める仕方、これまでの生を意図的に死ぬための方法
  - 訓練として理解される洗礼準備：永遠なる真の生への準備であるのではなく、修練

  → 再生することができるために、死の道において死ななくてはならない

- 真理の試練：真理へ向けた道程、死の修練の真正さを試さなければならない
  - 真理そのものの到達となるようなものに対して、いわば固有性を持ち、自立したものである理由：

    「真理を求めるお前、お前は自分の内に死の修練を確かにするようなことを知らなければならない。お前が生命を知るのはその後だ」

■ 洗礼神学における第二の強調点の移動

- 過ちの問題：堕落と穢れ
  - テルトゥリアヌス→種を媒介にしてアダムから今に至る世代を越えて連鎖する伝達の原理を中心に組織

魂が不純で汚れて穢れているという事実	魂が悪魔の力の下に屈し、悪魔が魂を支配しているので、これを取り払わなければならないという事実

- ３，４世紀の過ちの神学、洗礼の神学は、悪魔の作用という考えに強く結びつけられる
  - 過ち：サタンの勝利
  - 過ちの清め：サタンに対するたえざる戦い、恒常的でつねに繰り返される闘争の形
- キリスト教徒になればなるほど悪魔の攻撃にさらされる。
- 聖化されなければならないのは、志願者の人生だけでなく、受洗者の人生そのもの、私たちの内なる他者、魂の奥底にいる他者に対する絶えざる戦い
- 真理にむかう道程は、この他者を追放すること：

  他者がまだ居座っていないか、この他者に対する戦いの状況はどうか、それが戻ってきて新たな攻撃を仕掛けてきたときに抵抗できるのか、など

  → 知るための一連の検証の試練を経由する必要がある

結論。回心の問題を中心に主体性と真理の関係が練り上げ直されること。P180，L16

■ 洗礼の効果そのものの再考の必要性

- 紀元後２世紀の洗礼神学：受洗者洗礼により生命と真理の道に（一度で決定的に）入ると考える傾向
  - 洗礼は諸存在を聖別し、完徳の道に導いていく
  - 選ばれし者、完徳なる者という考え→グノーシス派との対話？異議申し立て？再評価につながる
- キリスト教は二つの事柄を区別することで応答
  - 洗礼そのものによって確実に形づくられる、過去の過ちの贖い
    かりそめの洗礼
  - 堕落さえしなければキリスト教徒の生活の最後に与えられる救済
    そのひとが死んだときに起きる第二の洗礼→そのときにこそ、完全な生、地上ではありえない選ばれた生に到達できる
- 洗礼とは、真の生活に荘厳かつ決定的に導き入れてくれるものではなく、死の修練や他者との戦いや他者の追放を伴うような生命の恒常的なモデルに

  → たえず私たちの存在の真正さを確かめていなければならない

  → 私たち自身を監視し、真理そのものをみずからの内に引き入れ、私たちを見、監視し、裁き、導いている者（牧師、導き手）に対して、私たちの存在の真理を供さなければならない。
    - 自分に死の修練を強いること
    - 他者と闘うこと

    →主体性の問題、主体性―真理の主題が完全に変化

■ 主体性と真理の関係の問題

- 個人の同一性の問題ではなく、回心の問題
  - どのようにして別のものになるのか
  - どのようにして、いままでそうであったものであることをやめることができるのか
- 同一性の断絶の問題においてこそ、主体性と真理の関係の問題が取り結ばれた：主体性と真理の関係の根本形式
  - キリスト教においては、主体を真理へと関係づけるものである回心は、ある時点以降、死から出発して考えられるようになった

→ 自己の自己に対する訓練、死の修練

- 主体の真理への関係づけは、死や他者との関係に加えて、検証や試練を、つまり自己自身についての真理を懸けることを要求する
  - 死の修練がなければ、他者との戦いや闘争がなければ、知っていることの真理を自己と他者とに現出さ

せなければ、真理に赴くことはできない。

整理

単純に、キリスト教という信仰を持つことと、その意図を洗礼という形で示す（≒告白）のではなく、信仰はそのままに、その洗礼は人生をかけて神に対して自分の罪深さを告白し続けていく――試練／修練の宣言のようなものとして行われるものであること。それは、第二の生を迎えるにあたり、死の道において死ぬことを意味するようなもの。悪魔との戦いを続けていくということ。そしてその生きざまは、後見人や司祭によって検証されたり証明されるということ。このような制度化が、「主体性」というものの考え方に影響。

→ 自分の行ないや生き様を「告白」はしても、その裏付けが他者からとられる必要があるということ：後見人や司祭の立ち位置？

→ 魂の真理を現出する（自分の存在を語り表明する）行為は、一人では成り立たないのか？どのような他者が求められるのか？キリスト教という文脈においては後見人や司祭の存在が必要ということ？…まあ、アイデンティティも他者という存在あってこそのもの、とはいえるが、そういうこと？？？：「主体」という概念とのつながりも確認できるとうれしい。